

日刊建設工業新聞

発行所 ©日刊建設工業新聞社 2012 〒105-0021 東京都港区東新橋2-2-10 電話03(3433)7151 URL:http://www.decn.co.jp/

(12)

2012年(平成24年)4月9日(月曜日)



竹林 征三

山口大学時間学研究所客員教授

「コンクリートから人へ」のキャッチフレーズのもとにダムやスロープ堤防をはじめとする公共事業が無駄なものとして中止や大幅に削減していく現政権に天罰(天譴)が下ったかのよう

に東日本大震災・大津波に見舞われた。その復旧も進まない中、追い打ちをかけるように台風12号、15号が上陸し、各地に甚大な被害と爪跡を残した。

熊野川の上流十津川等の川筋は急峻な山地に深い河谷が切りぎざまれている。そこに1000メートルの豪雨があれば、近年特に注目されている深層崩壊と

称する山地崩壊が起こる。狭隘な渓谷に崩落した大量の土塊は一瞬にして川を堰止めて大湖水を誕生させる。

天然ダムと河道閉塞は似て非なるもの

水が五つ形成され、その後の大雨でそれらが決壊すれば土石流の大洪水が生じ下流に大変な災害を及ぼすこととなるので連日、マスコミが土砂ダムの動向を伝えている。

「土砂崩れダム」「堰き止め湖」「河道閉塞」「天然ダム」等々用語の使用で混乱している。

国土交通省は「河道閉塞」の名で記者発表しているが、報道各紙で「河道閉塞」の名称を採用しているところはない。「土砂ダム」、「土砂崩れダム」の名称を採用している社が多いが、同じ社でも時により名称が混乱している。「天然ダム」を採用している社も少ないが見受けられる。

全国各地でこのような自然現象による災害はこれからも頻繁に発生し、「天然ダム」と称してきた。既に学術用語としても定着し、天然ダムに関する博士論文、他学術報文もこれまで多くある。

「天然ダム」の名称が飛び交い混乱しだしたのか。

平成16(2004)年の新潟県中越地震で信濃川支川の芋川沿いの山古志村を

その形成の要因と誘因からほぼまって、挙動特性も全く異なる似て非なる現象である。似て非なるものを擬きという。

天然ダムとは山間部を流れる河川において、大地震や豪雨が誘因となり崩れやすい山地(素因)が大崩壊して一瞬にして狭い深谷を堰き止める現象である。

中心にいくつもの天然ダムが出来て、大騒動した折、この芋川の天然ダムが決壊すれば下流は土石流の被害を受ける。天然ダムは人々を苦しめる大変な悪玉のイメージである。

一方、天然とか自然とかは美しく、大切にしなければならぬ善玉のイメージが強い。天然ダムという用語は災害をもたらす悪玉に対する名前としてふさわし

急に流速が変わるので堆積が進むので特に河口閉塞と称している。

河川は生きていて常に変化してやまない。人々に恵みを与える時あれば人々にとって恐ろしい荒びのキバをむくことも多い。

一方、河道閉塞は洪水の流れが河床勾配の変化点や合流点で徐々に土砂の流送力を失い土砂を堆積して河川の疏通断面を徐々に小さくして行く現象で、平野部で生起する現象で河口部においては河川から海洋へと

必ず決壊する運命である。

しかし、天然ダムの土砂量が流入してくる水量より有意に小さい場合はいずれ

必ず決壊する運命である。

所
論
諸
論